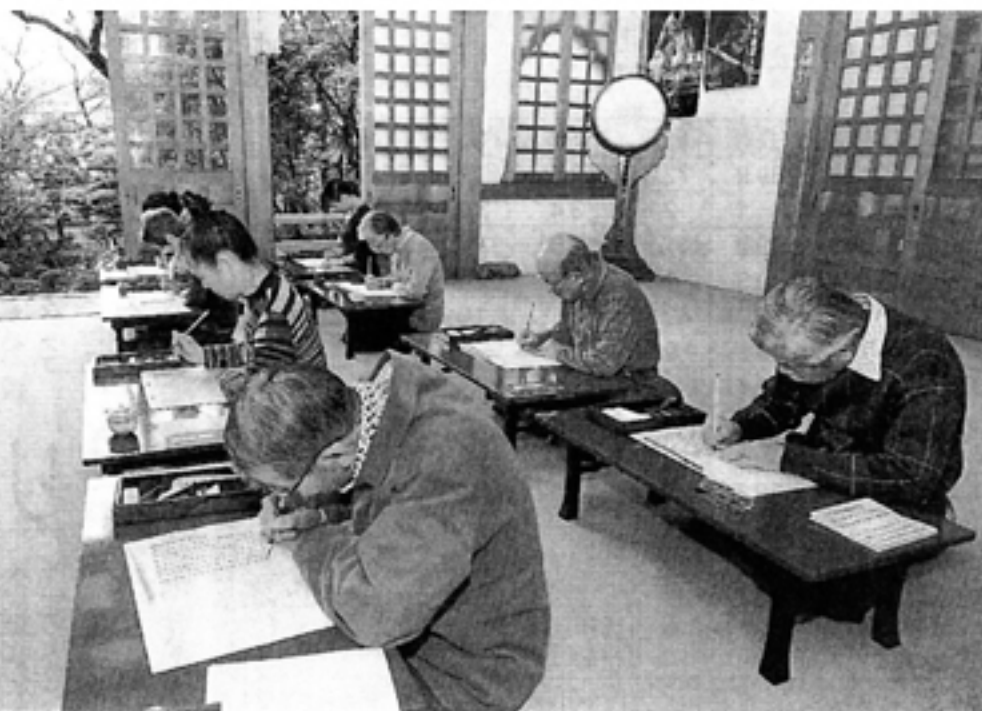


お寺で週末修行

■ 写経

ゆったり無心の心地よさ



筆を握るのは、中学時代の書き初め以来。「おもしろい字」と言われたことはあっても、上手、きれいとほめられたことはない。ちよっぴり不安に思いつながら、横浜市金沢区の白山東光禅寺で写経に挑戦した。

同寺は、臨済宗建長寺派の禅寺で、鎌倉時代初期の建立。21代目にあたる小瀬昌弘住職(65)は、1978年から希望者を募って写経の体験を受け付けている。「ZENと写経とお茶の会」と名付けた会は、現在年2回、来年の春で90回目を迎える。

墨とすずり、文鎮、筆がそろえてある本堂の机の前に正座して、背筋をのばす。「うまく書く必要はありません。誠心誠意、一字一字に心をこめて書いて下さい」。小瀬住職の言葉に

神様を集中させて写経に取り組み参加者たち。聞こえるのは雨音だけ

肩の力が抜けた。半紙の下に般若心経のお手本を置き、一文字ずつ丹念になぞっていく。墨がにじんだ。筆の先が割れる。この漢字、何て読むんだっけ……。いろいろな思いが浮かんで消える。半分ほど終えたところで、筆を置き首をまわす。朝から降り続けている雨が、境内の木々の葉にあたってバラバラと音をたてている。後半はリズムをつかめ、文字を追って一気に書きあげた。

終わりに日付と名前、そして「ありがとうございます」と記す。小瀬住職は「願いごとを書く場合もあります。ここで



般若心経の手本をなぞりながら書く。いずれも近藤悦朗撮影

は、〇〇して欲しいという「請求書」でなく、「領収書」の言葉をとって奉納しています」と言う。

この日の参加者は7人。60〜70代を中心とした「常連」さんで、写経歴約30年のベテランも。退職後に妻に勧められて写経を始めたという伊藤春夫さん(80)は「書いているうちに雑念が消える。終わったあとは、身を清めたような気持ちになります」と、さっぱりした顔だ。約1時間半ずっと正座をしていたため、足はしびれたが、半紙いっぱいには並んだ字を見たら、達成感がこみ上げてきた。

般若心経は、600巻にも及ぶ「大般若経」を簡潔にまとめた仏教の基本経典。小瀬住職は「近い方のご供養のために写経をする人も多のですが、心を整える精神修行のために体験したいという若い人も増えていきます」と話す。

パソコンで文字を打ち、必要な書類はすぐにコピーができる現代。筆で文字をゆったりとつづる写経は、無心に時を過ごす心地よさに気づかせてくれた。

(ライター・本間朋子)